

二〇二四年十二月三十日

「一年はあっという間に終わるな」

朝食の時に、父と母が話していた。シンジヨ
ーもその通りだと思う。四月から始まった新
しいクラスでの令和六年度も、あと三学期だ
けになってしまった。
シンジヨーは、冬休みの宿題をほぼ終わり
にしていた。書き初めも仕上げた。担任から
出された宿題も終えた。残るは二つだった。
一つは手伝いである。毎日二つはやるこ

と」が学年から出された宿題であった。シン
ジヨーは毎日、皿洗いと洗濯物たたみをし続
けていた。そして今日は大掃除。いろんな所
をきれいにしよう、朝から父に言われてい
た。
そしてもう一つ残っているのが、校長先生
から出された宿題だ。終業式、校長の言
葉の中で、こんな話があった。
「校長先生から、扇小の皆さんに一つ宿題を
出します。一月になったら聞きますので、
必ず考えておいて下さい。何を考えたら
いたいかというところ、どんな大人になるか、

んな笑顔でとつてもかわい子たちばかりで	任として、入学式で子供たちに出会った。担任	今日は始業式だった。私は、一年組の担任	二〇五一年四月十日	。で、改めて読んでみた。	の姿を書いた。その下書きがまだ残っていた	てしまったので、三十九歳でももちろん教員	二十九歳で小学校教員をしていたのだ。	た。それが終業式前ギリギリだったのだ。	一度、三十九歳の自分の姿を書いて、提出し	ちおう実行委員が受け取ってくれたが、もう	任がそれに気づいてくれた。その作文は、い	分の姿を書いて、一度提出してしまった。担	ている。しかし、勘違いして、二十九歳の自	二〇五一年、シンジヨ一は三十九歳になっ	委員に提出をしたが、下書きがとつてあった。	出しから、二〇五一年の作文を探した。実行	自分」に書いていた。シンジヨ一は机の引き	そうだ、クラスで作っている文集、「未来の	ても、と考えて、シンジヨ一はハツとした。	「どんな大人になっってるか」と言われ	配もしてしまった。	分かるのだらうかと、シンジヨ一は余計な心
---------------------	-----------------------	---------------------	-----------	--------------	----------------------	----------------------	--------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------------	-----------	----------------------

